

<Ⅶ 展示研究報告 (5)>

令和元年度第7回企画展
「学生成果展」井澤 尚子*¹ 石垣 悟*² 佐々木 麻紀子*³
立川 泰史*⁴ 深石 圭子*⁵

当館は、これまで「学生作品展」として学生の卒業制作や実習・演習で制作した作品を紹介してきたが、今年度以降は文章や画像での成果も盛り込んでいくことを決めた。そのため名称も「学生成果展」と改め、令和元年度第7回企画展（会期：令和2（2020）年2月27日（木）－4月24日（金））として開催した。

1. 現代生活学部 現代家政学科

井澤 尚子

企業連携授業への取り組み

一スターバックスコーヒージャパン店舗のデザインエレメント制作一

現代家政学科の専門科目「ファッションカラー演習」では、2015年度から「スターバックスコーヒージャパン株式会社（東京都品川区上大崎）」との企業連携授業に取り組んでいる。

この授業ではスターバックスコーヒージャパン株式会社（以下、スターバックスコーヒー）から毎回課題として提示される実際の店舗を対象に、カラーコーディネート考えたデザインエレメント（店舗内を構成するデザインの要素）を学生自身がデザインし制作している。課題となる店舗は、スターバックスコーヒーのこだわりが詰め込まれた話題店が多く、学生自身も「やりがい」と「緊張感」を持って企画・制作に取り組んでいる。その結果、毎回手作り感溢れる作品の数々が出来上がり、高評価を得ている。

さらに毎回、授業最終日の講評会において、スターバックスコーヒーの店舗設計担当のデザイナーのみなさんの前で自身の作品のプレゼンテーションを行い、プロのみなさんから直接講評をいただくという貴重な

経験を積んでいる。厳しくも温かいアドバイスは、大学での学びが社会に繋がるという現実味と、作品が完成したという手応えによって、今後の大学での学びの励みにもなっている。

次に、これまで課題となった店舗を紹介する。

- ①「スターバックスコーヒー飯田橋サクラテラス店」
(2015年度)
- ②「スターバックスコーヒー神戸メリケンパーク店」
(2016年度)
- ③「スターバックスコーヒー京都二寧坂ヤサカ茶屋店」
(2017年度)
- ④「スターバックスコーヒー目黒セントラルスクエア店」
(2018年度)
- ⑤「スターバックスコーヒー川越鐘つき通り店」
(2019年度)

授業では企画に先立ちスターバックスコーヒーの本社見学を行い、企業理念、課題店舗のデザインコンセプト等を伺い、実施可能な店舗には足を運び、店舗内の視察・近隣環境の調査をするという過程を踏んでいる。

今回の展示では、各種エレメントの中から《クッション編》をご覧いただいた。展示作品を制作した学生の氏名と課題店舗を次に掲載する。

- | | |
|---------|-------------------|
| 1491207 | 内田早耶（飯田橋サクラテラス店） |
| 1491226 | 手島紗雪（飯田橋サクラテラス店） |
| 1491229 | 野口涼加（飯田橋サクラテラス店） |
| 1491114 | 片岡麻里奈（神戸メリケンパーク店） |
| 1591138 | 松岡美智（神戸メリケンパーク店） |
| 1591136 | 藤田百恵（京都二寧坂ヤサカ茶屋店） |

*¹ 井澤 尚子（いさわ しょうこ）令和元年度現代生活学部現代家政学科准教授*² 石垣 悟（いしがき さとる）令和元年度現代生活学部現代家政学科准教授*³ 佐々木 麻紀子（ささき まきこ）令和元年度現代生活学部生活デザイン学科助教*⁴ 立川 泰史（たちかわ やすふみ）令和元年度現代生活学部児童学科准教授*⁵ 深石 圭子（ふかいし けいこ）令和元年度現代生活学部生活デザイン学科助教

1691324 高橋好実（京都二寧坂ヤサカ茶屋店）
1791232 土肥若夏風（目黒セントラルスクエア店）

これまで制作した作品は、クッションの他にコースター、カップホルダーなどのコーヒータイムを豊かにするグッズ、スターバックスコーヒー各店舗の特徴にもなっている「店舗内コーナー」での使用をイメージした座布団類、子ども用ブランケット、タペストリーなどの作品もあり、その中には店舗所在地を地場産業とする、産地特有の布地を用いるケースもある。さらに、各地域の特産品をデザインモチーフにしイメージした色遣いの作品も多く、事前調査の結果が活かされていることを都度実感している。

近年では、スターバックスコーヒーの経営方針でもある「環境を考えたデザイン」もテーマ内容に加わり、使用済みのエプロンを提供していただき、作品の一部に利用するなどの試みも行っている。また、布地以外の材料を使った作品の企画・制作も増え、学生の“目

の付け所”の多様さに感心することも多い。

企業連携授業は、学生自身が大学での学びは「企業＝社会」に繋がるということ、ストレートに感じることでできる取り組みであると考えている。2020年1月には、新型コロナウイルスが世界的に拡大した。今後も企業連携授業を予定しているが、「With コロナ」、「After コロナ」の社会変化の中で、学生の作品がどのような姿を見せてくれるのか、注目していきたい。

最後になりましたが、企業連携授業が始まった当初からコーディネーターとしてご指導をいただいている本学客員教授 松崎照明先生、並びに「スターバックスコーヒー ジャパン株式会社 店舗開発本部 店舗設計部 サステイナブルデザインチーム」のスタッフのみなさまの本学学生へのきめ細やかなご対応につきまして、深く感謝を申し上げます。



飯田橋サクラテラス店



神戸メリケンパーク店



京都二寧坂ヤサカ茶屋店



目黒セントラルスクエア店



川越鐘つき通り店

写真 課題となったスターバックスコーヒーの各店舗

2. 現代生活学部 現代家政学科

博物館実習の拓本

今回展示した「東京家政学院発祥の地」の拓本は、令和元年度前期の博物館実習で、現代家政学科の4年生3名が採ったものである。

博物館実習では、特に人文系博物館における資料の

石垣 悟

調査・収集スキルの1つである拓本の採拓を行っている。この技術は、中国の金石学をベースにしたもので、もたらされた当初は日本でも美術的作品を作る技術として重宝されてきた。

博物館における拓本は、石碑や板碑といった貴重な歴史的遺産でありながら博物館に運んでくることの難しいもの（主として不動産）を調査・収集して展示できる術として広く用いられる。また、石碑等に刻まれ

た文字や図像などが摩耗等により肉眼で判別しにくい場合には、拓本を採ることによって明確になることも少なくないため、調査法としても重宝されてきた。

本学では、最初に学内で柄鏡や銅鏡などを用いて乾拓と湿拓を行い、その後、実際に外に出て石碑の拓本を採っている。今回採拓した「東京家政学院発祥の地」の石碑は、大正12年に大江スミ先生が家政研究所を開いた地(現新宿区富久町38-17)にある。平成26年、大江先生を偲んで建てられたもので、建てられた5月21日は本学の創立記念日でもある。石碑の大きさは、縦66cmほど、横100cmほどと比較的大型で、石板に文字の彫られた陰刻である。石碑の建つ敷地にあるマンションには、現在も大江先生の御親族の方が暮らしておられることから、ご許可・ご挨拶をしたうえで行った。

今回行った拓本は、湿拓と呼ばれる方法である。石碑を水で濡らした後、和紙を当て、水分を適度に抜いたうえで墨をつけたスポンジ状のもの(タンポという)で表面を軽くたたきながら一字一字丁寧に和紙に写しとっていった。採拓を実施した7月9日は、気温も高くなってきており、和紙の乾燥するスピードを考慮して手際よく行わなければならない、3名が協力しながら行った。

なお、生活デザイン学科(町田キャンパス)の博物館実習では、校舎玄関にある大江スミ先生の胸像下の碑文の拓本を採っている。

こうして培った技術を活かして、同年夏期に行った集中の博物館実習(岩手県陸前高田市にて実施)では、市内の津波記念碑の拓本も採り、陸前高田市立博物館に寄贈させていただいた。



3. 現代生活学部 生活デザイン学科

佐々木 麻紀子

卒業研究作品

「初期アールヌーヴォー様式の特徴を活かした友禅染による作品制作」
小林 莉和

作品のテーマとしたアールヌーヴォーは19世紀にイギリスで確立した装飾様式であり、絵画、宝飾品、ガラス工芸作品や建築など様々な作品が残されている。アールヌーヴォー様式の特徴としてしなやかな曲線や多彩な色彩が挙げられる。

一方、友禅染は、筒に入れた防染糊を模様の輪郭に置いて防染をして色を染分けていく日本の伝統的な染色技法である。その特徴は、繊細な細い糸目を用いることで多彩な色を染分けたり、手描きならではの曲線的な模様を美しく表現したりすることができる事である。

そこで卒業研究では、19世紀のアールヌーヴォー様式のステンドグラスのようなはっきりとした輪郭や透け感のある鮮やかな色彩による草花をモチーフとして友禅染の技法を用いた作品制作を行った。

透け感のある作品を目指すため、シルクシフォンやローン、オーガンジーなど薄手の生地を用いて試作を行い、糸目糊の太さや置き易さ、色彩、布の透け感、風合いなどからシルクシフォンで作品制作を行った。通常の授業で扱う生地は縮緬や紬地など地厚で安定感のある生地を用いるが、今回の作品では、ガラスのような「透け感」を出すため薄手の生地という扱いにくい生地に挑戦している。生地がゆがみやすく、また生地の強度も低いため一つ一つの作業をより丁寧行うことに神経を使った。

モチーフとした草花は、華やかな印象の百合と自身の名前の由来となっている茉莉花(ジャスミン)である。模様の高さや色の組合せなども検討しつつ、糊筒に入れた友禅糊で思うような糸目を描けるようになるまで試作を繰り返した。

友禅染はデザインから最後の水元まで多くの工程が存在する。それぞれの工程の内容を理解し、生じる様々な問題を一つ一つ解決して効率の良い方法を模索していく過程は、卒業研究という長い時間をかけて制作する作品にふさわしい染色技法であったと考えている。

完成した作品は、白、ピンク、オレンジの3色の百合と所々に金彩を施した淡いピンクのジャスミンの花が地色の緑色の中に蔓のように絡み合いながら全体に散りばめられており、透明感のあるさわやかな作品に

仕上がった。作品の生地、柄、色使い、糸目の強弱等、手描き友禅染の特徴を活かした作品が制作できた。

4. 現代生活学部 児童学科

立川 泰史

「造形表現基礎」授業の製作作品の展示

1. 「造形表現基礎」という授業について

(1) 授業の概要

「造形表現基礎」の授業は、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭を目指す学生を対象にし、子どもたちの感性や育ちに働きかける「美的な創造経験」を通して、造形教育に求められる基礎的な知識や基本的な技能を学ぶ機会として位置付く。また、本授業は、「子どもと造形」や「図画工作科教育」など、幼稚園教諭や小学校教諭の養成課程に位置付く授業と異なり、教育の実践に先立って学生が造形表現の楽しさや喜びを味わい、子どもたちの造形表現に寄り添う眼差しを涵養することを期待して令和元年度に新設された授業である。

(2) 自然素材の魅力に学ぶ

日常触れる四季の変化は、そこに暮らす私たちの生活感情を豊かにしている。それは、地域や風土に根ざした歴史や文化、語り継がれてきた物語を味わいながら暮らす喜びでもあり、次代を担う子どもたちにも伝えていきたいものである。この授業では、自然の材料を使った身近な造形物に触れるだけでなく、自然のよさや美しさと向き合い、自然を生活の道具として取入れる発想や情操を育む資質や能力を培うことを目指している。実際には、造形的な創造経験を通して、学生が自ら手に取った自然物の魅力に気づき、自然と共生する生活感情の大切さを学んでいく（図1）。



図1. 百合花模様部分



図2. 茉莉花模様部分



図3. 作品全体



図1 「世界にひとつの気になる樹」

こうした造形表現においては、学内で拾い集めた木枝や木の実、葉や石などを材料にする。それらの自然の材料に隠れている特徴や魅力を生かす組み合わせを考えながら、どのような花や実がつくのか想像し、「世界にひとつの気になる樹」を表現していく。

はじめから固まったイメージをトレースしていく造形表現とは異なり、素材から感じたよさや面白さに気付きながら試行錯誤する。ゆえにイメージは意外な変化を繰り返し、自分でも「気になるような姿」を見せ始めるといった造形体験となる。

2. 身体感覚に根ざす季節のイメージを表す創造的な造形体験

(1) 自然を身近な生活と結ぶ感性

自然の材料を生かす造形活動は、とくに幼児にとって身近な四季に触れたり味わったりする生活感情の自覚を促す契機となる。春夏秋冬といった四季折々のよさや美しさを肌で感じ、自身の生活と結びつけながら美しいものを尊び愛おしむ感性は、こうした造形活動で培われることが期待できる。



図2 春の光や風を閉じこめた「春のおでかけバッグ」

例えば「春のおでかけバッグ」という造形活動は、その中で興味や関心を惹かれ、着目したものを手に取る「材料集め」から始まる(図2)。集めた自然材料を画用紙の上に配置しながら試行錯誤し、そこから何かを感じ取っている自分との対話が深まっていく。そのうちに、春夏秋冬という枠組みや言葉を越え、自分らしい「世界の感じかた」をもつことが発想の起点となってくることが期待できる。

その際、つくり手は自然材料から語りかけられることに応えようとする。またその一方で、つくり手の「こうあってほしい」という期待像も重なり、はじめて「自分だけの固有なイメージ」が産声をあげる。今日、造

形的なイメージは、こうした素材感覚や期待に満ちた情動が双方向的に働き合って産まれるらしいと、脳科学や神経科学の分野からも捉えられるようになった。そして、イメージを「目に見える形や色」に置き換えることもまた、人々の自然な言語活動の営みだともいわれる。

こうした造形活動で大切にしたいのは、季節ごとに移り変わる光や風、新しい季節の訪れを感じさせる香りなど、身体感覚で感じている事象そのものである。

身体感覚に根ざす造形体験は美的な感性の原風景になり、表現を方向付ける工夫の振り幅を広げながら「つくりだす喜び」を実感する機会となっている。

(2) 保育・教育としての造形と創造経験

では、保育や教育に求められる造形の意義や創造経験の価値とは何だろうか。「つくりだす」のは、モノではなく、自分固有の意味や価値である。例えば子どもたちの表現を褒めるとき、「上手にできたね」よりも「あなたらしい」と言葉掛けするほうが喜ばれる。保育者や教師は、子どもたちを芸術家予備軍にしようとしているのではなく、美しい生活をつくりだす創造経験を通して、文化を担うパーソナリティー(人格)を形成することを目的にする。

もちろん作品の制作プロセスには失敗や成功もあり、戸惑いやひらめきもある。これらを自分事として体験的に理解し、自分の指先や体全体で新しい見方や感じ方を捉え返していくことができる(図3)。



図3 指先からも実感する造形価値

造形文化という先人たちが営んだ生き方や社会を尊び、「手を加えれば加えるほど、世界の見方が広がる喜び」を、学生たちは子どもにも伝えようとする。

今回展示した学生らの授業作品は、こうした営みの

第一歩として、貴重な軌跡であることも確かである。

※出品者一覧

| | | | |
|---------|--------|---------|--------|
| 1994101 | 天野 沙紀 | 1994102 | 磯口 美生 |
| 1994103 | 井上 稀日 | 1994104 | 岩間 理子 |
| 1994105 | 内海 七星 | 1994106 | 大下 夏乃 |
| 1194107 | 奥嶋 菜月 | 1194108 | 鍵野 朱音 |
| 1194109 | 歌城 真子 | 1194110 | 鬼頭 美優 |
| 1194111 | 坂間 美香子 | 1194112 | 鈴木 優希 |
| 1194113 | 醍醐 利佳 | 1194114 | 竹田 実穂 |
| 1994115 | 永井 里菜 | 1994116 | 中臺 玲美 |
| 1994117 | 中村 風花 | 1194118 | 濱口 穂香 |
| 1194119 | 平本 穂菜美 | 1194120 | 松尾 幸 |
| 1194121 | 宮下 結衣 | 1994122 | 八島 海織 |
| 1994123 | 山田 綺香 | 1194124 | 吉田 奈那子 |
| 1994201 | 井口 瑞穂 | 1994202 | 板倉 鈴華 |
| 1994203 | 岩城 里歩 | 1994205 | 江口 袖花 |
| 1994206 | 大山 恵実 | 1994207 | 小沢 晶 |
| 1994208 | 梶浦 彩良 | 1994209 | 亀井 望未 |
| 1994210 | 坂井 えみり | 1194211 | 澤田 なつみ |
| 1994212 | 瀬下 栞 | 1194213 | 高橋 里佳 |
| 1194214 | 田中 瑠花 | 1994215 | 中田 玲 |
| 1194216 | 中丸 きらら | 1994217 | 長谷川 未佳 |
| 1994218 | 濱中 優奈 | 1994219 | 堀内 菜恵 |
| 1994220 | 松本 彩乃 | 1994221 | 森本 雪乃 |
| 1994222 | 山岸 新菜 | 1994223 | 山本 希美 |

5. 現代生活学部 生活デザイン学科

深石 圭子

はじめに

生活デザイン学科住生活デザイン分野の卒業研究は、卒業制作と研究論文に分けられ、そのどちらかの方式で指導されるが、令和元年度は、22名中、19名が卒業制作に取り組んだ。

「HACHIOJI FOREST II ～緑に囲まれた駅ビル～」

杉本 優莉愛

杉本さんは、前期の卒業研究において京王八王子駅の駅ビルの計画である「HACHIOJI FOREST」の設計をしており、その延長として後期の卒業研究で同敷地内に別棟の駅ビル「HACHIOJI FOREST II」の設計に取り組んだ。

JR八王子駅と京王八王子駅は、乗り換え等のため多くの人々が行き交う場所である。両駅ビルを歩行者

専用の高架歩道であるペDESTリアンデッキでつなげ、直接行き来ができるように計画した。その上で、駅ビルの建物のデザインは、山に囲まれた八王子の「山」と「木」をモチーフとして取り入れ設計をした。

設計した駅ビル「HACHIOJI FOREST II」の規模は、地下1階、地上8階建である。建物の形状は、格子状の壁面を緩やかな曲面で構成し、2棟の建物間には広場を設けている。その広場には、大階段を設けることによって、周辺の空間とはレベル差により分離し、独自の空間を構成している。さらに、その大階段を下ることで、外部から直接この建物の地下階へアプローチすることができ、この広場と双方の建物との一体化を図っている。

前面道路からもこの格子状の曲面が感じられるように配置されており、人の流れがこの壁に沿って誘導されるように計画している（図-1）。建物の表面を覆うこの格子状の壁面を緑化することで、親しみをもって人々が集う空間を意識した計画としている。緑化された格子は、部分的に格子を崩したデザインとしており、外部に対する圧迫感を抑えながら、立面においても建物の表情に変化を与えている（図-2）。

4・6・8階には両方の建物をつなぐ空中連絡通路があるが、平面上、角度を変えて設けられており、建物がそびえる空間に変化を与えている。

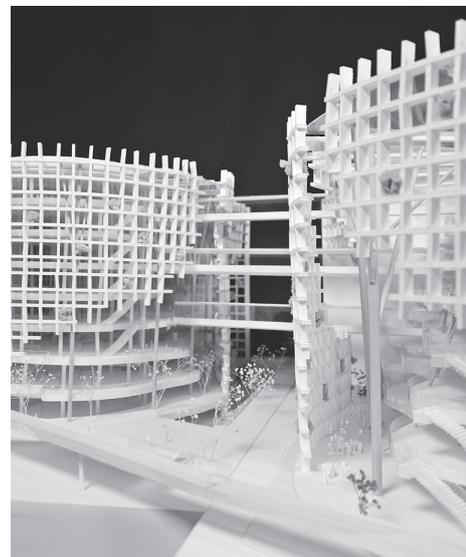


図-1 模型写真

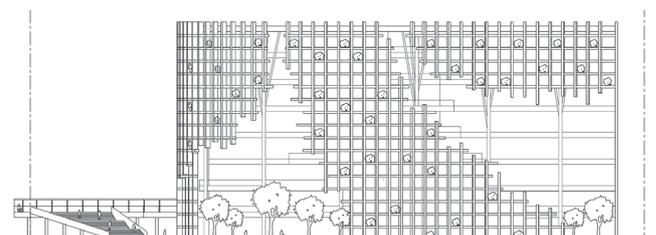


図-2 南立面図

格子状壁面の内側には、大きな吹抜が配置されており、曲面を活かした極めて開放的な空間がある。格子面はガラス等で外部と区切られていないが、ガラス屋根がかかっており、内部でもなく外部でもない曖昧な中間領域となっている。ここには、吹抜に「木」をモチーフとした7本のシンプルなデザインの柱が配置されている。さらに、各階の床を階段状に配置することで、山の緩やかな等高線をイメージし、「山」の中にあるような雰囲気を実感的に表現している（図-3）。テナントが入る収益部分も大部分の壁は曲面で構成され、中間領域、外部空間を含めて、全体的に一体感のある空間を演出している。

この駅ビルが経路駅としての利用だけでなく、そこに集う人々の新しい価値観を見出す場所であってほしいとの作者の願いが込められている。



図-3 内部の吹抜空間

「SHIBAHIRO SQUARE～町田市 シバヒロに建つ集合住宅～」
早川 真奈

多目的広場「町田シバヒロ」（東京都町田市）は、交通量の多い町田街道に接し、旧町田市役所が位置していた敷地である。周囲には、小学校、中学校、予備校などの教育機関が密集し、小田急小田原線町田駅も徒歩5分と近い場所である。ここに「立体的な街」をコンセプトとしたファミリーを対象とした集合住宅の設計を行った。

この集合住宅の規模は、地上10階建である。大きなフレームの中に5m×13mの箱（住空間）をブロックのように積み重ね、2個で1ユニット（2層メゾネット）と3個で1ユニット（3層メゾネット）が混在した構成となっている（図-4）。1階は、各住戸の独立

性を高めるため、共用のエントランスに重点を置いていない。1階の住戸は個別の玄関から各々アプローチする。接地階以外の住戸については、1階ピロティにある中央のエレベーター又は階段を経由して、奇数階へ移動しアプローチする「スキップフロア方式」を採用しており、偶数階は、メゾネットの非アクセス階が配置されているため、そこに共用廊下は設けず、各住戸にルーフテラスが配されている。接地階を除く奇数階の共用廊下は、3・7各階は東西方向、5・9階は南北方向に直線的に延びており、単純なシステムの中に空間の豊かさを作り出している。各住戸の玄関は、メゾネットの最下層からだけではなく、中層や最上層にある場合もあり、そのバリエーションは多岐に渡る。



図-4 模型写真

住戸ユニットを構成する箱の接続は、各階をあえてずらして重ねることで、メゾネットの下階の屋根がルーフテラスや共用廊下として利用できるようになっており、各戸の外部空間が確保されるとともに、立体構成も複雑になっている（図-5）。各戸に設けられたルーフテラスは、2層メゾネットの場合、下層の屋根が、3層メゾネットの場合、下層・中層の屋根がテラスの床を構成している（図-6）。各住戸間は外部の吹抜や吹きさらしの共用廊下が入り組んでおり、通風についても配慮されている。また、メゾネットを組み合わせることで、共用廊下のある階を制限できる。それにより、集合住宅でありながら、外部からの視線を遮ることができ、プライバシーを重視した計画を実現させている。さらに、いわゆる高層集合住宅で問題となりやすい、日照についての対策は、建物の下層階・中層階には壁面にガラスを多く採用し、上層階は、日が入りすぎるのを防ぐために壁を多く配置することで対応している。本作品は、集まって住まうことを再考

し、それを「立体的な」構成にすることによって、集合住宅のいくつかの問題を解決しようと試みた作品として評価できる。



図-5 4階平面図

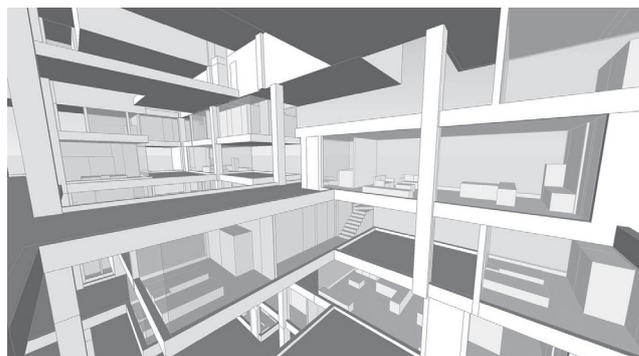


図-6 各住戸を繋ぐ共用廊下